二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 斐芝嘉和
挿絵 高浜太郎

プロローグ 007
第一章 緑の瞳の少女 009
第二章 罠 034
第三章 地下壕の攻防 053
第四章 獣蠱 080
第五章 絡みつく淫呪 123
第六章 落魄 188

登場人物紹介

Characters

佐々木零（ささきれい）

「呪い屋」の通り名で知られる凄腕の呪術師。十代半ばの容姿をしているが、年齢不詳。偽悪趣味の皮肉屋。

一ノ瀬（いちのせ） ジョスリン

インド系のハーフ、古代密教を伝える一族の子孫。警察呪術大学高等部一年生。

羽賀（はが） 御影（みかげ）

羽賀大社の跡取り娘。星辰学園在籍時は、羽賀退魔社を組織しＯＲＧＡＮＯＮと戦った。

これまでのあらすじ

「呪い屋」と呼ばれる凄腕の女呪術師――佐々木零。
彼女は生徒として星辰学園高等部に通う傍ら、「羽賀退魔社」の一員として、羽賀の跡取り娘・羽賀御影、強力な霊媒の能力者・宮内早苗とともに、人に仇なす怪異を討つべく活躍していた。
だが、そんな少女たちの前に強大な敵が立ちふさがる。
この世の混乱と破壊を目論む秘密結社「ＯＲＧＡＮＯＮ」。
彼らは敵対する羽賀退魔社を駆逐するため、行く先々で零たちの行く手を阻もうとする。
その罠にかかり、囚われ、数限りない陵辱に晒される少女退魔師たち。
だが、零をはじめとする羽賀退魔社の一行は死闘の末に、ＯＲＧＡＮＯＮの手先たちとの戦いに勝利したのであった……。

『第四章　獣蠱』より

豊満な膨らみが、ブレザーの上からムギュッと握られた。柔肉に喰い込む太い指。柔らかく歪んだ乳肉が指の間から搾り出され、白い布地を押し上げて丸く張り詰める。

「おお、柔らかすぎず硬すぎず、いい感じだな」

口端からダラリと涎を垂らした獣人が、瑞々しい弾力を愉しむようにギュ、ギュ、と揉み込んだ。黒いインナーと白いブレザーに守られた双球は、喰い込む指を懸命に押し返し、美しい釣鐘形を保とうとする。

形よい乳房の上で、力強い愛撫と豊かな弾力がせめぎ合う。火照った乳肌の奥でみっちり詰まった柔肉が、捻れ、擦れ合い、じわじわと蓄積する温かな心地よさ。刺戟を受けた乳腺が熱いモノを溜め、羞じらう心を裏切って肉果がいやらしく熟していく。

「いくら揉んでも型くずれしないな。いい乳だ」

乳房を掴んだ男の手が、パン生地を捏ねるように大きな円を描き始めた。柔らかな膨らみを掌で圧し潰し、指をクニ、クニ、と伸縮させて美乳を歪める。乳肌に湧く淡い感覚。しっとり湿ったシャツとジャストフィットしたスポーツブラのカップが、肉釣鐘の表面をしごくのだ。胸先に閃く快感は、圧力を受けた乳首が柔肉にめり込み、乳暈の裏側をコリコリした硬さで責め立てるせい。

（畜生、なんでだっ⁉　どうして防御呪が発動しないんだ⁉）

硬い指先にめり込まれた場所に、チクリ、チクリ、と小さな痛みがあった。鋭い鈎爪が

布地を貫き、乳肌を軽く刺している。水妖を灼くときに使った観無量呪が、シャツやタイツに仕込んだ防御呪詛まで焼き切ってしまったのか。喰い込む鈎爪にブレザーが破れ、シャツに小さな穴が開く。ブラのカップが最後の砦となり、柔肌に血が出るほどの傷はつけられなかったが、甘噛みされているような感覚までは防げなかった。
しかもそれが、心地よい。
「や、めろぉっ！　呪うぞ、テメェっ！」
はしたない反応を示す己の身体を恥じ、頬を赤らめながら叫ぶと。
「おい、なんか匂わないか？」
「匂う匂う。女の匂いだ」
脚を舐めていた獣人たちがスンスンと鼻を鳴らしつつ、濁声を交わし始めた。
（ちょ、待……や、やめろバカ犬っ!!）
焦る零をからかうように、震える太股を舐めながらしきりに匂いを嗅ぐ少年たち。尖った鼻先が脚のつけ根に向き、翳りの中で羞じらう秘所へゆっくりと迫る。
「どこから匂ってくるのかなあ？」
「……っ！」
犬の鼻先がミニスカートの中へ挿し込まれた。内腿をくすぐる生温かな鼻息。執拗に嗅ぎ回られ、呪い屋の顔がカァッと赤らむ。感じやすい割れ目にはまだ、水妖に嬲られたと

きの感覚が微かに残っていた。包皮の中で痼ったクリトリスは、油断しているといきなりズキン！　と快感を発する。膣口やビラビラに燻る淡い疼きは、蠢くイトミミズに誘われて滲んだ愛蜜の名残。獣化した少年の犬並みに鋭い鼻で、あの場所を嗅がれたら――。

「ヌチュヌチュに濡れてる匂いだ。いやらしい女だな、俺たちに犯されたがってるぜ」

「違うっ!!」

耳の先まで真っ赤に染めて咄嗟に否定したのに、獣たちは聞いていなかった。犯ろう犯ろう、と口々に言いながらさらに鼻息を荒げ、牙を剥いて涎を垂らし、零の頬や手をビチャビチャと舐める。

「おら、沢井！　この女を支えろ。落とすんじゃねぇぞ」

「えぇ？　また俺ッスか？　たまには一番に犯りてぇっスよ」

ぶうっと頬を膨らませたブルドッグ顔の少年が、零の背後に回り込んだ。腋に腕を通し、栗色の髪に潰れた鼻を押しつけながら羽交い締めにする。

「お前、昂奮すると噛むだろ？　お前が最初に犯ったら、死体としなきゃなんねぇ」

「先輩たちも最後はみんなで噛むじゃないですか。俺まだ、生きた女と犯ってないのに」

人間だったころの上下関係がそのまま継承されているのか、ブルドッグ少年はブツブツ言いながらもそれ以上逆らわなかった。グイッと胸を反らせ、突き出た腹の上に零の背中を引き上げると、艶やかな髪に鼻を押しつけてスンスンと匂いを嗅ぐ。

「うぅっ⁉」
頭皮に染み込む生温かな鼻息。思わず竦めた零のうなじが、粘つく舌にピチャピチャと舐め回された。気持ち悪い涎がタートルネックに染み込み、背中まで垂れてくる。
「離せ、この……畜生どもっ！」
必死に藻掻く女呪術師の左右に精悍な顔つきの犬男が立ち、腕を巻きつけるようにして黒タイツの脚を抱え込んだ。力ずくで広げられる太腿。柔肌を守る薄布に爪がかかり、
ピリ、ピリリっ！
穴と穴が繋がって、白く輝く瑞々しい柔肉が大きく丸く搾り出される。
（クソッタレっ！　なんて格好させるんだ、畜生っ！）
ブルドッグ男に背を取られ、伸びやかな脚を左右に大きく広げられて――タイトなミニスカートの裾は、太腿に押し上げられて腰の半ばまでずり上がっていた。破れそうなくらい張り詰めた純白の布地の下に、黒タイツに守られた恥部が恥ずかしそうに顔を覗かせている。薄い黒布を透かして見える白いパンティ。逆三角形の股布に浮き上がる、見るからに柔らかそうな肉畝の形。内腿にできたタイツの穴は脚のつけ根付近まで拡がり、羞恥に火照って桜色に染まった柔肌がプニュッとはみ出していた。
腰から下は床に水平になっているのに、上半身は背後の少年の分厚い胸が背もたれになり、ほぼまっすぐに起きている。うなじに吹きかかる生温かな鼻息を嫌って首を曲げれば、

自らの痴態を覗き込むような姿に。悔しげに歪んだ猫目には、ブレザーの中でたわわに実り、呼吸に合わせてわずかに上下する乳房が映り込む。

引き攣れた黒シャツは獣人の爪で掻かれた穴がいくつも空き、白いスポーツブラと淡くピンクに輝く乳肌がはみ出して、柔らかく盛り上がっていた。背中で縒れているのか、シャツの前身頃に余裕がない。羞じらいに身じろぎして乳房が揺れると、張り詰めた黒布がピリ、ピリ、と裂け、柔肉をはみ出させた穴が少しずつ拡がっていく。

「なんだ、もう溢れてるのか？　濡れ濡れじゃねぇか。やらしい女だな」

大きく開かれた股間を覗き込み、犬男たちが笑う。水妖に濡らされたタイツもパンティもまだ乾いておらず、肌にピッタリ貼りついていやらしく光っていた。

「違うって、言ってるだろうがっ！」

「なにが違うってんだ？　イイ色に染まってるじゃねぇか」

血走った目がジロジロと見つめるのは、タイツの穴からはみ出した太腿の柔肉。薄布の黒と柔肌の象牙色が織りなす艶めかしいマーブル模様。桜色に染まった瑞々しい牝肌はしっとりとした汗に濡れ、淡い牝香を放っている。

「へへ、たまんねぇなあこの香り」

必死に閉じようと藻掻く脚に、男たちの犬顔が近づいた。柔肌に吹きかかる生温かい鼻息が膝裏をくすぐり、むっちりとした太腿を這い上がって恥部へ――。

べちょん！　べちょん！　べちょん！

右から伸びた長い舌が、股間へ襲いかかった。黒布の上から柔らかな膨らみを舐めまくり、ねっとりとした唾液を塗りつける。左から顔を寄せた犬男は濡れた鼻を恥部に擦りつけ、スンスンと匂いを嗅いだ。

「や……やめ、ろぉっ！」

布目を潜り抜け、淫華をくすぐる生温かな鼻息。タイツを濡らした涎が下着を染み抜け、恥丘におぞましいヌルヌルを感じた。しなやかな舌に圧された股布は割れ目をこじ開けて肉の潤みに潜り込み、敏感な粘膜花弁がぐちゅぐちゅぬちゅぬちゅとしごかれる。

「うぅ、く、ンぅぅ……」

喰い縛った歯の間から、甘さを含んだ声が漏れた。ハッとして慌てて口を噤んだのに、股間に群がった少年たちの犬耳は誤魔化せない。

「ほうら、気持ちよくなっただろ？　俺たちに任せておけって」

翻る舌が力強さを増す。ヌチャ、ヌチャ、と音を立てつつ割れ目を抉る。しなやかな犬舌は薄布ごと柔肉を揉みあげた。歪められた割れ目の奥でぬちゅぬちゅと擦れ合う粘膜花弁。押し込まれた下着が粘膜ビラをしごくと、花芯に淡い悦びが湧き上がる。

「クソ、気持ちよくなんて、ねぇ……あっ!?」

少年たちを掻き分けて、一際大柄な男が脚の間へ入り込んできた。ウチワのように大き

な垂れ耳、だぶついた頬と生気のないドロンとした目。薬物中毒のセントバーナードがいたら、たぶんこんな顔だろう。

「う、う、ウソは、よくないんだな。ドドド、ドロボウの、は、始まり、なんだな」

ダラダラと涎の滴を垂らしたセントバーナード男が、口を大きく開けた。獣人に舐め回されてぐっちょりと濡れた女呪術師の股間に、そのままかぶりつく。

「くぅっ⁉」

激痛を予感して首を竦めた零だが、牙は軽く当たっただけで肌には喰い込まなかった。が、尻割れに下からべちゃりと添えられる長い舌。粘つく唾液に濡れた肉膜が柔肉を揉み込むように蠢いて、タイツとパンティを器用に掴む。

「し、身体検査をするんだな。うう、ウソを吐いていたら、おお、お仕置きなんだな」

「や……やめろぉっ！」

必死に身体を揺すって抵抗したのに、薄布を巻き込んだ舌は振り払えなかった。ゆっくりと引き下ろされ、捲れ返るタイツと下着。零の膝を腋に抱えていた左右の獣人が、細い足首を掴み直し、グイッと上に引き上げる。

（ああ、ああ……畜生っ！）

黒と白の薄布が一度に引っ張られ、美尻が剥き出されてしまった。柔らかな双球はほんのりピンクに染まり、色も形も桃の実のよう。浅い尻割れの真ん中に、鳶色の菊蕾が恥ず

かしそうに震えている。
「なんだ？　毛が生えてないぞ」
仰向いて前方に突き出された恥部を覗き込み、少年たちがいやらしく笑う。真上に吊り上げられて細いV字を作った太腿の狭間、柔らかく盛り上がった肉畝が作る割れ目は、幼子のようにツルンとしていた。見た目はあどけないのに、いくつもの舌に舐めまくられ、揉みくちゃにされて、茹だったように紅い。唾液に濡れた柔肉のスリットはわずかに口を開き、その隙間に紅くヌメヌメ光る肉花弁の縁がほんの少しだけ顔を覗かせている。
「俺たちに見て欲しくて剃ったのか？　いい心構えだな」
「いや、剃り跡はないぞ。元から生えてないんだろ」
少年たちが嘲笑う無毛の恥丘は、斜に構えた女呪術師の密かなコンプレックス。頬が火を噴きそうなほど熱くなった。繊細な肉畝をくすぐる荒い鼻息も、羞恥に拍車をかける。
「ち、畜生っ！　見るな、笑うなッ!!」
掠れた声で叫んだ零は、羽交い締めにされた身体を揺すり、吊り上げられた脚を必死に藻掻かせて、秘部に寄せられた犬の鼻から少しでも遠離ろうとした。が、宙に浮いた桃尻は誘うように揺れただけで、群がった獣人たちを余計に昂奮させてしまう。
「い、いい匂いなんだな。き、気持ちよくなってるしょ、しょ、証拠なんだな」
吃音の犬男が湿った鼻を寄せ、これ見よがしにスンスンと嗅いだ。

「くぅぅ……ッ！」
爆発する羞恥。頬がパァッと赤らむ。必死に身を捩り、内を向いた膝を締めて柔らかな太腿を摺り合わせた。
ぬちゅ。
内腿に挟まれて歪んだ秘部に、小さく響く湿った音。水妖に弄り回され、下着の上からビチャビチャと舐め回された粘膜花弁には、自覚している以上の愛蜜が滲んでいた。割れ目から粘液の滴がトロリと溢れ出し、周囲に漂う甘酸っぱい芳香が濃くなる。
「な、な、なにか垂れてきたんだな。お、お、オシッコじゃ、ないんだな」
「ち、畜生……くぁっ⁉」
叫ぼうとした瞬間、横から伸びてきた手に乳房をギュッと握り潰された。柔肉に太い指が喰い込み、ブレザーと黒シャツを貫く鈎爪。乳肌を刺す小さな痛みにクッと呻く間に、周囲の獣人たちがセントバーナード男をけしかける。
「どうします、小村さん？　こいつウソ吐きですよ」
「も、もも、もちろん、お、お、お仕置き、なんだな」
ぴた。
ひんやり湿った鼻が、火照った割れ目に押しつけられた。濡れた舌が肉畝をこじ開け、感じやすいビラビラの縁にねっとりした唾液を塗りつけてくる。

「ど……どこ舐めてんだ、バカヤロウっ！」
叫ぶ声が上擦った。長い犬舌は吸盤のように吸いつき、ミミズのように波打って繊細な柔肉を揉みあげる。汚らわしい、おぞましいと思うのに、ぬちゃぬちゃくちゅくちゅ舐め回された秘部には甘い感覚が湧いてしまう。
「くっ！　あぅっ！」
素早く動く舌に合わせ、羽交い締めにされて宙に浮いた身体が激しく捻れた。ゆさゆさと揺れる乳房が大きな手に掴まれ、ブレザーごと握り潰されて柔らかく歪む。吊り上げられた脚には少年たちが群がり、ビチャビチャネチュネチュ舐め回された。
「うぅぅ、や、やめろ、この……ド畜生っ！」
叫ぶ零を無視し、小村は左右に踊る美尻を抱えて素早く舌を使う。
びちゃっ！　ちゅぱっ！　びちゃ！　ちゅぱ！
繰り返し響く湿った音。揉みまくられた肉畝に微弱電流が渦巻き、煮えるように熱くなる。閃く舌先は生温かなぬめりに乗り、次第に秘裂の奥へ届くようになった。舐められた肉ビラに快感が弾ける。ジュワッと滲む甘蜜。花芯に染み渡る心地よい痺れを恥じて、女呪術師の頬が一気に赤らむ。
「どうだ、小村さんの舌は気持ちいいだろう？」
胸に乗せられた大きな手が、乳房をギュッギュッと揉み始めた。捏ね潰された柔肉に淡

い悦びが湧き上がり、指が離れるとこらえがたい疼きが膨れ上がる。瑞々しい弾力を愉しむようにたっぷり愛撫した少年は、美乳に五本の指を喰い込ませ、乱暴に揺すった。
「くぅっ⁉　あぁ、うぅぅ……っ！」
荒々しい愛撫が気持ちいい。肉釣鐘の芯に淫欲が溜まる。焼きプリンのように揺れ動く柔肉の谷間がシャツの中で擦れ合い、互いをムニュムニュ揉み合って、じわりと高まる淫熱。甘美な波紋が乳肌に広がり、
（くそぉ……あ⁉　そ、そんな……っ⁉）
恥丘の奥が疼き始める。牡肉を受け容れるための淫らな肉穴が、昂る胸に共鳴して新たな蜜をじゅわじゅわと滲ませるのだ。牝の身体に備わった、恥ずかしい仕組み。どんなに羞じらっても、溢れ出す淫香は止められない。
「に、匂いが、き、きつくなってきたんだな。やや、やっぱりかか、感じてるんだな」
だらしない口端から大粒の涎を垂らし、セントバーナード男が満足そうに頷いた。舌をさらに深く挿し込み、肉花弁に滲んだ恥ずかしい粘液を舐めまくる。
「うぅっ！　ふ、ンぅぅ……」
生温かなぬめりに掻き分けられ、揉みくちゃにされる肉ビラ。しなやかな舌がびちゃびちゃ翻ると、繊細な粘膜器官に快感が湧いた。吊り上げられた太腿や折れ曲がった腹にジワジワと広がり、背筋を這い登る温かな痺れ。必死に唇を噛んでこらえようとするのに、

喉の奥からはしたない吐息が迫り上がり、震える唇からこぼれ出す。
「くぅ、ン……はぅっ⁉」
蕩ける感覚の中に、一際強い熱が弾けた。ぬちゅり、ぬちゅり、と鳴る舌が、とうとう膣穴に達したのだ。快楽神経の集中した壺口がぬめる舌先に激しく責められ、穿られて、ビビン！　ビビン！　と電気を発する。
セントバーナード男の舌は細く尖り、力強くくねって肉穴を穿った。繊細な膣粘膜をこじ開けながら舐め回し、奥へ、奥へ――。
（く、クソ、畜生……ッ！）
蜜壺に甘い衝撃が弾け、身体がビクビクッと反り返った。深々と潜り込んでくる犬舌に操られているように柳腰がくねってしまう。恥ずかしいのに止められない。悔しいのに抗えない。肉奥に刻み込まれる快感に、宙に浮いた尻がはしたなく踊ってしまう。
「偉そうなこと言ってた割に、感じまくりじゃねぇか」
「か、感じてなんか……くぅっ⁉」
びちゃ！　びちゃ！
敏感な耳朶を激しく舐め回された。吸いつく舌から逃れようと顔を背けても、別の少年が待ち構えていて、ギュッと瞑った瞼や形よい鼻に生臭い唾液を塗りつけられる。
気持ち悪いぬめりは手にも、脚にもあった。シベリアンハスキー顔の少年がふたり、左

『第五章　絡みつく淫呪』より

「ぅぷっ⁉　は、うぅぅぅ……」
口端や鼻が、黒々とした剛毛にチクチク刺された。頬に擦れる硬い肉棹。緩く捻れた淫茎は海の匂いのする粘液を薄く滲ませ、たくましい弾力で柔肌を揉み込んでくる。
おぞましい――はずなのに、胸がドキドキする。
この熱さ、この硬さ。
コレを、このゴツゴツした淫棒を、疼く肉孔にねじ込んでもらえたらどんなに気持ちいいだろう。雄々しく張り出したエラで蜜壺をグチュグチュ掻き回されたら、血管の浮き上がった棹部で膣口をしごいてもらえたら――。
（だ、ダメだ、考え、るな！）
男の腹に額を擦りつけ、懸命に首を振って、立ち込める淫夢を追い払う。ゆさゆさっと揺れる乳房、卑猥にくねる桃尻。桜色に輝く柔肌が真っ赤な肉クサビに突かれ、呪文回路に先走り汁を塗りつけられて、余計に気持ちよくなってしまう。
「見ろよ、オチンチンに頬摺りしてやがる」
「いやらしいガキだな。本当にコレが、あの呪い屋か？」
少女たちに支配され、半ば獣化した男たちだが、羽賀に対するコンプレックスはまだ残っているようだ。女呪術師におぞましい肉塊を擦りつけ、サカリのついた牝犬のような姿をここぞとばかりに嘲笑う――と。

「それくらいにしておけ。そんなナリでも、我々の大先輩だぞ」
低い声が響き、男たちの動きがピタッと止まった。部下たちからひとり離れていた、隊長の速水だ。まさか、助けてくれるのか――縋る気持ちで肩越しに振り返った零は、
「あ……あぁっ⁉」
赤銅色に輝く勇ましい巨根に息を呑む。二十センチはあろうかという長くて太い肉棹の先に、鶏卵のような亀頭。尖端は指のように伸び、淫茎との境にはエラはなく、代わりにラクダのコブのようなイボイボが前後二列に分かれ、互い違いに突き出していた。
「いやらしい汁をダラダラ垂らしてるんだ、イかしてやらにゃ可哀想だろう」
「や、やめ……ろぉっ！」
そんなおぞましい男根を突き込まれたら――上擦る悲鳴を漏らしかけたとき。
グイ！
尻谷に指がかかり、割り開かれた。桃尻にペニスを擦りつけていた男たちが腰の横へ回り込み、肛門の傍に指をかけて左右に引いたのだ。柔らかく伸びる肉蕾、ずる、ずる、と抜け出てくるパンティの薄布。濡れた舌に舐められているような、恥ずかしくも心地よい感覚が尻孔に湧く。
（うぅ、くそぉ……あっ⁉）
あと少しですべて抜け出そうになった薄布が、指のように細くて硬いモノに再び押し込

まれた。菊膜を炙る、火傷しそうな熱――速水の異形のペニスだ。指のように伸びた尖端で薄布を突き、菊門へ再び押し込もうとする。
「あぁうっ、そ、そっちはぁ……うぅッ！」
「前の穴はイヤだろ？　ケツで我慢してやる」
恩着せがましく言った速水が、逃れようとして必死にくねる腰をガチッと掴んだ。左右に分かれた男たちは尻房に被せた手指を蠢かし、柔肉を力強く愛撫する。
（あぁ、尻が、尻がぁぁ……ッ！）
ゴムの塊のような弾力にグリグリと揉み込まれ、湧き上がる肛悦。布目に染み込んだ淫水と腸液が、弛んだ排泄孔に塗りつけられる。
ズズ、ズ、ズズ、ズ。
イボつき亀頭の切っ先が、二センチ潜り込んでは一センチ戻り、また二センチ進んでは一センチ退く。次第に径を増す肉棒。
「くぅぅ、く、うぅぅ……！」
粘液に濡れた布地は、長くて熱い犬舌のようだった。ぬめりを纏った織り目の微妙なザラザラが繊細な菊膜をしごき、恥ずかしい痺れを産みつけてくる。
「や、め……尻は、やめ、ろぉぉぉ……っ！」
肛悦を羞じらい、尻房に力を込めて肉孔を窄めると、鼻先をねじ込んだ肉棒がグリグリ

動き、熱い太さで括約筋を揉み込んできた。
「息を吐いて力を抜け。抵抗しても痛いだけだぞ」
「だ、だれが、そんな、こと……はぅあっ⁉」
卑猥な落書きに走る電流。強がろうとした呪い屋の尻を、イボイボの指先が揉み込んだのだ。グニュ、グニュ、と揉み歪められた柔肉が、芯から熱くなる。いやらしい愛撫から逃れようと伸び上がって仰け反れば、ゆさっと揺れる乳房の側面に肉クサビが擦りつけられ、胸にも悦びが爆発した。喉の奥から迫り上がる甘い吐息。意思に反して尻孔が弛み、おぞましい肉塊が次第に太さを増してくる。
グ、ググ、グググググ……コリ！
蕩けた菊膜が、硬いモノにこじられた。軋むほど伸びきった肛門にエラ代わりの肉鋲が触れ、グリ、グリと刻み込まれる激感。ビククンッ！　と四つん這いの背が雷に打たれたように痙攣し、腕の間でたわわに実った乳果が細かく震える。
（うぅぅ、あぁぁ……頭が、煮え、るぅぅ……）
排泄孔に燃え上がった淫らな炎が、背骨を伝って頭の中まで流れ込んできた。脳髄が茹だる。全身が火照り、柔肌を彩る呪文回路に香汗の滴が噴き出す。
グポ、グポ、グポ。
肛門にはまり込んだ異形の亀頭は、半ばまで潜り込んだところで小刻みに前後し始めた。

コリコリ硬い肉コブに、揉みくちゃにされる括約筋。指のように伸びた尖端は一足早く奥へ潜り込み、繊細な直腸粘膜をしごき立てる。
胎内に湧き上がる温かな感覚。たくましい太さにマッサージされた肛門に熱い痺れが染み広がり、溢れる声が止められない。意識がピンク色に染め上げられる。抉られた尻孔と直結したように口が開き、喘ぐ唇の端から涎がタラタラ垂れ落ちる。
「お？　なんだコイツ、涎を垂らしてるぞ。そんなにケツの穴が気持ちいいのか？」
零の頭を股間へ引き寄せていた男が、陰嚢を濡らす粘液に気づいて嘲笑った。
「ち、ちが……あう⁉　く、ぅぅぅっ⁉」
ギチ、ギチチ……股間を締め上げる、細く縒れた股布。排泄孔に押し込まれた分だけ薄布が足りなくなり、限界まで伸びきって、秘裂を緊縛する。
ビキン！　ビキキンッ‼
細紐に圧し潰されたクリトリスに、鮮烈な快美感が閃いた。ただの肉豆ではない。煮え滾る血潮を溜めてピンピンに張り詰めた性感極点だ。尻を掴んだ速水がグイグイ腰を動かすと、捩れた布地がわずかに上下し、淫核が捏ね回される。ぷっくりと厚みを増した粘膜花弁が、牝蜜に濡れた股紐に激しくしごかれた。細紐に責め立てられた淫華とコブつきの肉塊に抉られた排泄孔の間に、強烈な電流が往復する。
「あひぅ、ひぁ、きひぅぅぅぅッ‼」

背が弓なりに反り返り、飛び立つように伸び上がる女呪術師。男の腕に抱えられた腰をグッとうしろへ突き出したまま、上半身を持ち上げて膝立ちになった。胸が前を向き、黒布に緊縛された巨乳が激しく縦揺れする。

腰を抱えた腕がさらに伸び、腹に巻きついた。シャツの上から柔肉を揉み込み、上へ上へと這い上がっていく。鳩尾の前で交差しつつ、ゆさゆさと揺れる乳房へ――むぎゅ！

「くひぃッ!!」

歪んだ胸乳が一気に燃え上がった。太い指の間から搾り出された柔肌が弾けんばかりに張り詰めて、紅い呪文回路に愛蜜のような汗が滲む。

（うぅ、浮く……浮いち、ま、うぅぅ……っ！）

溢れる悦びに煽られて、舞い上がる意識。

天井を向いてあふぅ、と悩ましい声を漏らす呪い屋を、背後から抱き締めた男が胡座（あぐら）を掻きながらグイッと引き寄せる。組まれた脚の上に尻が落ち、身体が起き上がって恥部が前に迫り出す。

「ふはっ!?　あ、あぁあっ!!」

グリグリグリッ！

肛門が、真上を向いた肉棒に抉られた。蠢く直腸粘膜が亀頭に巻きついた薄布にしごかれ、ビィン！　ビィン！　と電気を発する。逃れようと藻掻けば排泄孔のすぐ裏側が、コ

リ、コリ、コリ、と肉クサビのコブコブに揉み込まれた。刻み込まれる肉悦、燃え上がる炎の柱。踊る火の穂に炙られて、伸びやかな女体が男の膝の上で妖しくくねる。

尻孔に押し込まれて引き攣れたパンティが、細く捩れてY字に歪み、腰からずり落ちた。キリキリ締めつけられるクリトリス、激発する快美感。

「や、めぇぇぇえ……っ！」

裏返った声を張り上げて悶えれば、捻れる尻の真ん中が硬い肉棒にズリズリとしごかれてしまう。背を貫く快感に弾かれて反り返る身体。胸が張り、たわわに実った肉果が前方へ突き出された。ゆさりゆさりと上下に弾み、汗にぬめった乳谷が激しく擦れ合う。

「ほら、股を開けよ」

巻きついた手が腹を撫でながら滑り落ち、茹で上がったように紅い内腿にかかった。

「あぅ、くぁ、ああっ！」

上から下へグイグイと圧され、肉棒を咥え込んだ尻孔がグポグポ鳴る。

ぶじゅ……じゅ、じゅじゅじゅ……。

裏側から圧し歪められた膣がねっとりした粘液を噴きこぼした。深度を増す淫棒に押し込まれたパンティは、細く捩れてY字に歪み、破れそうなほど引き攣れる。太腿の間にかかったタイツも左右に引き伸ばされ、いくつも空いた穴がさらに広がって――。

ピ、ピリリ……ビビッ！

黒い薄布が勢いよく引き裂けた。弾けるように開く膝。広がる太腿に引っ張られたパンティも、ついに限界に達してビチッと引き裂ける。

「きひぁッ!!」

痼ったクリトリスが、閃く薄布に叩かれた。雷に打たれたように仰け反ると、薄布に行く手を阻まれ立ち往生していた男根がズ、ズズズン！　と一気に根元まで潜り込む。

硬い肉塊に貫かれる直腸、コブコブに揉みあげられる平滑筋。無理矢理押し拡げられた排泄器官が熱く痺れた。押し込まれる薄布が肛門をしごき、肉棹の捻れが括約筋を揉み込んで、尻の真ん中に快感が爆発する。菊門から脳天へ突き抜ける、白熱した杭。

「はぅぅぅ、く、はぅぅぅぅ……あふぁっ!?」

ゆさりゆさりと揺れる乳房の尖端に、スパーク。破裂しそうに膨れ上がった勃起乳首に、赤く輝く亀頭が押しつけられたのだ。見た目は普通のペニスのようだが、違う。

先走り汁を垂らした鈴口が、クワッと開いた。紅くヌラヌラ光る淫肉が、熟しきったグミの実のような肉豆を咥え込む。

コリ、コリ、コリ。

ピンピンに張り詰めた紅い薄皮が、ぬめる淫肉にしごかれた。乳頭に開いた微細な穴に牡エキスが染み込み、双球の先にパチパチと火花が踊る。

「くぅぅぅ……か、噛む、なぁぁぁ……あッ!?」

胸先のペニスを払い除けようとして振った手が、男に掴まれた。顔の左右に引き上げられ、掌に熱い塊が押しつけられる。勇ましく怒張したペニスだ。たくましい弾力にたおやかな細指が押し返され、しっとり湿った肉棒が掌に吸いついてくる。

「やめ、きたな……うぷっ!?」

喘ぐ唇にも、熱い肉塊。一瞬ハッと見開かれた猫目が、たちまち熱っぽく潤んでゆらゆらと揺れ始めた。

（く、口が……舌が、唇が……）

乳房と尻孔に湧き上がった肉悦が、いつのまにかこんなところまで染み広がっていた。味蕾に染み渡る甘辛い味に舌が心地よく痺れ、牡肉に触れた口唇粘膜が蕩けてしまう。太い肉塊がぐぽっと喉奥にはまり込むと、硬さに揉まれた咽喉腔に快感の細波。圧し潰された舌の根や淫茎に擦れた上顎にじゅわ、じゅわ、と唾液が溢れる。

気道を遡って鼻腔に満ちる、濃密な牡香。生臭い精臭に脳芯が灼かれ、意識が飛びそうになった。ホオズキのように赤らんだ頬がふわっと弛み、淫靡な微笑みを浮かべる。

「あは、イイお顔。オチンチンが大好きなのね。いやらしいヒト」

嘲笑う声が遠い。視界が揺れ、男たちやジョスリンの姿が霞む。

（イイ……気持ち、イイ……）

磨り潰された唇や舌に淫悦が湧いた。口唇が膣孔になってしまったかのよう。硬い肉瘤

がぐぽっと喉奥を突くと、頭のうしろに熱いモノが膨れ上がる。このたくましい淫棒を、もっと感じたい。もっともっと気持ちよくなりたい――蕩ける理性。

「ん、んぅぅ……んちゅ」

バラの花びらのような唇が勝手に窄み、肉棹に絡みついた。しなやかにくねる舌が亀頭を撫で回し、カリ首を抉るように舐め回す。ペニスを押しつけられた両手はゴツゴツしたディテールを愉しむようにギュッと曲がり、長い肉棹を握り締めてしごき始める。

太いペニスに犯された口から食道を下って胃の腑に、小腸に――異形の亀頭に抉られた直腸からS字結腸を遡り、大腸を伝って小腸へ。長い肉管の両端に溢れた悦びが胎内に充満し、身体中が気持ちよくなった。男根を押しつけられた掌から乳房に向けてビリビリと電流が走り、美乳を突き出すように背が反り返る。

「ようし、いい仔だ。イかせてやるぞ」

耳元で甘い囁き。男根を咥え込んだ女呪術師の口が、んはっといやらしい笑みを浮かべる。男の太腿に跨った脚がさらに大きく左右に開き、迫り出す秘部。栗色の髪を背後の厚い胸板に擦りつけ、体重を預けると――。

ズンッ！　ズン！　ズンッ！

尻孔にはまり込んだ剛直が力強い突き上げを始めた。

「ンぷはっ！　はっ！　ンァあッ！」

滾る亀頭にしごかれる排泄器官。突き出たコブコブが肉膜を掻き回し、激感を産みつける。荒々しい愛撫は薄い粘膜隔壁を圧し歪め、膣洞を裏側から揉み込んだ。太い腕に抱きかかえられた零が上下に弾むと、茹だったように紅い肉アケビからぶぐじゅ、ぶぐじゅ、と愛蜜の塊が噴きこぼれる。

「えぁう、あぁ、う、ンむっぷ⁉」

口唇を占拠した淫棒が、荒々しく動き始めた。揉み込まれる頬の内側、ぐぽぐぽと突きまくられる喉奥。ズッシリ重い肉棒に舌がしごかれ、唇がマッサージされる。

「んぇ、あぇ、あぅぁあぁぁぁぁ……ッ‼」

口と尻孔の間を往復する、熱い津波。伸び上がって身をくねらせれば、跳ね踊る乳房の先、亀頭に噛みつかれた乳首がキュッキュッときつく引っ張られる。炸裂する快美感。鮮烈な感覚が弾む肉釣鐘を貫き、脳天を突き上げる。

ビィン！　ビビビンッ！

シャツの残骸に締め上げられた両乳を、穴だらけのタイツに緊縛された太腿を、凄まじい感覚が走り回った。柔肌を飾る呪文回路が、硬いイボを生やした男の指にキュッキュッとしごかれたのだ。

「むぁひ、ひっ！　ンぷぁああっ！」

身体の内と外を駆け巡る電流に、あられもない声を張り上げて悶える女呪術師。ペニス

を握り締めた両手にグッと力がこもった。赤黒い怒張に絡みつく細指。亀頭を顔の傍に引き寄せ、たおやかな手を激しく動かし羽ばたくようにしごき立てる。
（あぁあ、イイ、イイっ！　手が、指が……蕩け、るぅうっ！）
ゴツゴツしたディテールに揉み込まれ、掌や指が気持ちよくなった。ジトッと汗ばんでぬめる肌だけでなく、華奢な骨まで愛撫されているような――。
グジュ、ブジュジュ！
前に迫り出した肉アケビが泡立った淫液を噴いた。高まる快感に肉洞が捻れ、焦れる膣襞をざわめかせて蠕動する。いやらしい蠢きは薄い肉膜を伝って直腸にも響き、
「おお、粘膜が波打ち始めた。搾られる！」
尻孔を犯した速水が獣のように唸りながら腰の動きを速めた。グチュグチュと卑猥な音を立てる排泄器官。肉瘤の突き出た亀頭が繊細な粘膜を滅茶苦茶に掻き回し、身体の奥底に激感を刻む。
「ン、んぷ、んむぅっ！　ら、らぇ、らぇらぇ、らぇらぁああっ！」
尻と口、両手と乳首に炸裂する快感に弾かれて、細い身体が荒波に揉まれる木の葉のように激しく捻れた。昂る女呪術師に共鳴し、群がるペニスも動きを強める。
（し、尻がぁぁ、口がぁああっ！）
グポグポと卑猥な音を立てて歪む尻孔が、燃えるように熱い。たくましい肉棒に揉み込

まれる括約筋。しごかれた直腸に鮮烈な快感が渦巻き、腰が右へ左へ捻れてしまう。

亀頭に抉られた喉奥には心地よい電撃が次々と炸裂。捻れた淫茎に捏ね潰される舌、エラにこじられる頬の内側――揉みくちゃにされた口唇粘膜に悦びの炎が踊り、ねっとりとした唾液を滲ませながら蕩けていく。

「んめぇあぁあっ！　むぇあ、むぇあ、ぁああンあンぁぅッ！」

突き上げられるままガクガクと揺れ、波打つ春声（あえぎ）を迸らせつつ遙かな高みへ駆け登っていく女呪術師。狂ったように髪を振り乱し、美乳をゆさゆさと振り立てながら舞い上がるように伸び上がり――。

「んぁ、ああぁあっ！　イく、イくイく、おふぃりれ、イッちゃぅぅぅっ――――ッ!!」

ビククンッ！

矢のような飛翔感に貫かれ、鋭く反り返った。遙かな虚空に意識が弾き飛ばされて、頭の中が真っ白になる。

ギュウッと窄まる尻孔の中で、ジュチュッと音が立つほど鋭くしゃぶる口の奥で、たくましい肉塊がムクムクッと膨れ上がる。手指に押しつけられたペニスが燃えたように熱くなり、つけ根から切っ先に向けて不穏な振動が走って――。

ビュククッ！　ドプ、ドプドプッ！

ビュパッ！　ビュルルルル！　ビュピュピュピュピュ……！

『第六章　落魄』より

「こ、こんなの挿入られたら、壊れちゃうわ……」
ゴクッと生唾を呑み込んだ真由美が、根元のほうを力強くしごいた。その上を握った瑞紀は、手首に捻りを加えつつ、淫茎の半ばからカリ首までを小刻みに責める。
「くぁあ！　やめ、バカ、離せぇえっ！」
ふたつの白い手が上下するたび激感が背を駆け抜け、肉棒のつけ根から尖端へ向けて熱いモノがジリ、ジリ、と迫り上がってきた。子宮に沸き立つ白濁液か。芯から熱せられた淫肉が強張り、締めつけてくる少女たちの細指をたくましい弾力で押し返す。喘ぐ筒先がチリチリして、先走り汁の滴がプクッと膨れ上がった。
（だ、ダメだ……出しちゃ、ダメだ……っ！）
ホオズキのように赤らんだ顔を左右に振り、野苺のように赤らんだ唇を噛んで、膨れ上がる射精欲求を懸命にこらえる女呪術師。肉悦に負けて射精したら、ＺＥＲＯを奪われてしまう――のに。
（ＺＥＲＯがいなきゃ、こいつらを……倒せ、な……い……）
考える端から思考が蕩けてきた。しなやかな少女の手指にシュッシュッとしごかれた疑似ペニスが、燃えるように熱い。紅い肉棒の芯に炎の柱が立ったよう。子宮に溜まった淫熱が噴きこぼれ、頭の底が炙られる。いかめしく怒張した亀頭には、まとわりつくような白い痺れ。天井に向けられた猫目が艶めかしく潤み、焦点を失ってゆらゆら揺れ始めた。

「あぁン、ふたりだけずるぅい！　私にもやらせてぇ！」
「ふぁうっ⁉」
巨根の根元に一際細い指が絡みつき、キュウッと締め上げられた。六花だ。
「や……め、ぇぇ……！」
ズクン！　ズクン！　ズクン！
つけ根を縊(くび)られた肥大化淫核が、いっそう激しく拍動し始めた。流れ込んだ血流が淫茎の中に滞り、出口を求めて暴れ回る。肉棹に浮かび上がった蔦のような血管がピクンピクンとおぞましく脈打ち、表皮の裏側から強張った淫肉を揉み立てた。クリトリスの表面に火のミミズが貼りつき、もぞもぞと這い回っているような――。
「すっごぉい、硬ぁい！　もう出ちゃいそう？」
口を寄せた六花が、疑似ペニスに向かって生温かな息を吹きかけた。
「くひっ⁉　ひぁ、うぅうっ！」
鈴口に渦巻くこらえがたいむず痒さ。芯を貫いた細管を伝い、強烈なウズウズが逆流する。込み上げてきた熱いモノがさらに沸騰し、喘ぐ筒先から、ナニかが迸りそうな予感。
（出す、もの、かぁっ！）
背後についた腕を突っ張り、男の腰に跨った脚を震わせて、零は下腹に力を込めた。
ギュウッ！

剛直を咥え込んだ尻孔が窄まり、捻れた直腸が男根を締め上げる。
「おお、いい具合だ」
悦びの唸り声をあげた速水が、真上を向いて屹立した肉棒を激しく突き上げ始めた。ゴリ、ゴリ、と動く肉塊。刻み込まれる肛悦。排泄孔に爆発した快感が、子宮を伝って肥大化クリトリスにまで流れ込む。
「やぅ、め、ええぇぇ……ッ!!」
逃れようと藻掻いたつもりなのに、深々と潜り込んだペニスが抜けるはずもなく、腹の中を余計にグリグリ掻き回されてしまった。
「うぁああ、あぁ、ああっ！」
肉コブを生やした亀頭が直腸奥を抉るたび、肥大化クリトリスの表面に浮き上がった蔦のような血管がおぞましく脈動する。芯に溜まった熱い粘液は鈴口のすぐ裏側まで迫り上がり、白い手の中から突き出た亀頭がビク！　ビク！　と別の生き物のように痙攣する。
（あぅうっ！　ち、乳首まで、ズキズキ、す、るぅうっ！）
しなやかな触手ペニスにキリキリと締め上げられた巨乳の先では、イチゴのように大きな乳首が狂おしく疼いていた。ピチャピチャと舐めまくられているクリトリスに嫉妬するかのように強張り、尖端に白い滴を膨らませて自己主張。
「ふぁ、く、あ……あ？　ぁあっ!?」

乳房に螺旋に巻きついた肉蛇の群が、シャツの穴から這い出してきた。小さな鎌首が持ち上がり、いきり勃つ肥大化乳首に狙いを定める。

（や、やめ……やめろ、やめて……）

ヴヴヴヴヴン、と機械仕掛けの玩具のように震えつつ、乳苺の側面に――ピタ。

「にゃうぇあああぁあぁぁああっ！　と、蕩けるぅぅ、蕩け、ちゃ、うぅぅ！」

微細な振動が、硬く痼った肉突起を責めまくる。乳首に渦巻いていた強烈な疼きが同じ強さの快感に変わり、共鳴した肥大化クリトリスまでビンビンしてしまう。放っておかれた膣孔がダダを捏ねるように蠕動し、

ぶちゅ、ちゅ、ちゅちゅちゅ……。

肉アケビの奥から濃密な愛液が噴き出してくる。

「うふふ、イイ匂い。感じてるのねお姉様」

青筋を立てていきり勃つ淫核に、いやらしく笑った六花が顔を寄せた。零の太腿に覆い被さるように抱きつき、柔らかな下腹に頬を擦りつけて――

ぷちゅ！

肉棒の根元に熱い唇が吸いついた。

「りゃ、りゃぁあっ!?」

ビキキ、ビキキッ！

ぬめりに触れられた淫肉が、凄まじい電撃を発しながら怒張。表皮に浮かんだ血管の網目がおぞましく脈打ち、肉笠の縁が弾けんばかりに厚みを増す。カリ首に甘酸っぱい牝蜜が滲み、芳醇な香りがねっとり濃くなる。

「ああ、いい香り。私までおかしな気分になっちゃう」

反対側から美島が、その少し上には瑞紀と真由美が――漂う牝フェロモンにぽうっと頬を赤らめた少女たちが、紅い唇を尖らせてプチュプチュと吸いついてきた。

「や、やめぁ……めぁ、めぁあああッ！」

熱いナメクジが裏筋に貼りつき、下から上へと何度も何度も這い上がる。吸盤のような唇がカリ首に密着し、その間から尖った舌が迫り出して、コリコリした海綿体を確かめるようにピチャピチャ舐め回された。

「やぅっ⁉　く、あうぅうッ‼」

絡みつく舌に誘われ、子宮に渦巻く強烈な疼きが肉棒の中へ飛び火し始める。生温かな唾液を塗りつけられた場所がジリジリ灼け、芳しい吐息に撫で回された肉クサビがおかしくなりそうなくらい焦れる。

（うぅダメ、そんなんじゃ……もっと強く、もっと……な、なに考えて……あぁ！）

淫らな悦びに呑み込まれそうな自分に気づき、顔がカァッと熱くなった。恥ずかしさがスパイスになったのか、ぴちょぴちょちゅぱちゅぱ舐め回された淫棒がますます気持ちよ

くなってしまう。

「めぁ、めぁあっ！　は、はな、離しぇぇえっ！」

狂ったように身悶え、群がる少女たちから逃れようと必死に腰を振るのに、尻孔を男根に貫かれているためしゃくるような動きしかできなかった。

ぬちょ！　くちゅ！　ぬちゃ！

野苺のような唇を掠めて激しく上下する疑似ペニス。真っ赤に張り詰めた側面が少女の瑞々しい頬に擦れ、サラサラと揺れる髪に包まれて、さらなる激感。

（も、燃える、クリトリスが、燃えちゃ、うぅうっ！）

濡れた口唇に導かれるように、肉棹へ流れ込む血流が勢いを増した。張り詰めた淫茎が火を噴きそうなほど熱い。肉棹の芯に凄まじい疼きが充満し、しなやかな女髪にくすぐられた鈴口が焦れてヒリヒリし始めた。

（うぅ、く……ああ、ダメ……うぅう！）

股間に膨れ上がるもどかしさ。少女たちの瑞々しい口唇は気持ちいいが、弱い。もっと強く、もっと激しく――なにかに擦りつけたい、強く握り締めて激しくしごきたい――。

「うふふ、ビクビクしてるわね。いつまで耐えられるかしら？」

妖しく微笑んだジョスリンが、そそり勃つ肉棒に覆い被さった。口を丸く大きく開き、尖端に先走り汁の滴をつけた肉塊を丸ごと、パク！

「ふぁ、あ、あぁぁ……ッ!!」
亀頭を包み込む生温かなぬめり。喉の奥から迫り上ってきた熱い吐息が紅い皮膜に浸透し、淫肉がさらにミチミチ硬くなる。クワッと張り出すエラのうしろに唾液に濡れた舌が絡みつき、縊れたカリ首を締め上げられた。
ぬちゃり、くちゅり。
強張る淫茎にも、少女たちの舌が群がった。尖った舌先が血管の網目を辿るようにチロチロと舐め回し、紅い唇が肉棒の根元にプチュッと吸いつく。
「や、めぇ…うっ！　くうぅぅ……」
「んむぅ、お、おほきい」
滾る肉クサビを咥え込んだジョスリンが、緑の瞳を妖しく光らせ、ちゅぱ！　と音が立つほど頬を窄めた。
ちゅるる、ちゅちゅ、ちゅうううぅぅぅ……！
「れ、ぅぁあっ!?」
尿道に溜まっていた先走り汁が吸い出され、肉棒の芯がズキン！　と疼く。背を駆け上る津波。脳髄が荒々しく揺さぶられ、頭のうしろがぼうっと煮え蕩けた。舌が縺れ、呂律(ろれつ)が回らない。口を開けて喘げば、出入りする空気に喉奥が愛撫され、オアズケを喰らった膣洞のようにウズウズし始める。

二次元ドリームノベルズ屈指の超人気シリーズ
「呪い屋零」待望の最新刊が2009年12月下旬発売！
新呪い屋零3
―淫夢迷宮―
ZERO
逆らえない、抗えない――！
淫らな暗示に操られるまま
痴態を晒す女退魔師!!
編集・発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
最新情報は公式サイトにて
ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/